

解放民問題から「新南部」建設へ

——「再建期」点描——

杉 山 直 人

一八六五年の南北戦争終結から、南部に駐留していた最後の連邦軍がルイジアナやサウス・キャロライナ、フロリダをあとに撤収してゆく一八七七年までを、アメリカ史では「再建期」と呼ぶ。再建期という時代がどのように動いたのか、南部小説を数十年読んできたのに私は関心がうすかった。事情は日本の多くの南部文学研究者もかわるまい。この時期、南部文学ではメイジャーな作品が見あたらないため、時代そのものについても多くを知る必要がないように見えるから。戦さに疲弊した南部白人にすれば日々の暮らしをたててゆくのが精一杯で、小説や詩を楽しむ余裕も乏しかっただろうし、彼らの生活の場たる南部も文学作品のマーケットとしてはじゅうぶんには機能しなっただろう。政治抗争と社会的混乱にあけくれたという意味では、南部の歴史のなかでも不安定で魅力的とはいにくい時代だった。だが「まえがき」でふれたとおり、再建期こそはジム・クロー時代から二〇世紀前半の南部を支配した社会的文化風土が醸成されていった時代だった。再建期がなければ、人種をめぐる否定的だったという意味で特徴的な、十九世紀後半の南部はあり得ず、ひいてはジム・クロー体制の沼から二〇世紀の南部ルネサンスという花が咲くこともなかった。

ジム・クロー体制（「人種分離政策にもとづく社会体制」の意味でもちいる）がそなえていた反動性や排他性をわれわれは知っている。解放民の辛酸についてもすでに紹介されてきた。現代クランの指導者デーヴィッド・デュークが一九九一年の

ルイジアナ州知事選で善戦するといった事実からもうかがえるように、こうした体制を今もよしとする人びとは少なくない。とはいえ、彼らがアメリカで将来的に多数派の座を奪還するだろう、などと考える人は実はまい。

「分離すれども平等」という人種分離政策は、究極的にはひとつの人種がひとつの社会を、ひとつの民族がひとつの国家を形成すべきだ、という考えに帰着する。だが、国家間の距離が物理的にも心理的にもせばまり、国を隔てる壁が次第に取り払われようとする二一世紀にあつて、一九六四年の公民権法案成立以前の社会を再構築することなど、しょせん時代錯誤の夢物語でしかない。ひとつの人種や民族が、ひとつの社会を形成し、ひとつの国家たりえた時代はじょじょに過去のものとなりつつある。多くの人種や民族をめぐる相互依存関係が強化されてゆくことは、現代世界の不可避の流れである。こうした現代のありかたを理解したうえで、しかし逆説的にあえて言えば、再建期から二〇世紀にいたる時代は、実は文学的には大いなる潜在的可能性を秘めた時代ではなかったのか。この時代にこそ南部小説が南部小説たる所以が生まれたのではなかったか。

つまり、黒人にたいする無理解と非情が白人の側にあつたからこそ、逆にフォークナーはたとえば亡くなった妻を嘆いて「ガラスのおはじき玉みたいな大きな涙」をながす「黒衣の道化師」たるライダー（『行け、モーセ』収録）を描きだすことができた。フォークナーに批判的な黒人批評家をしてまで賞賛を惜しまないような作品が描けたのである。ジム・クロー体制が南部社会を支配していたからこそ、幼いときには共に遊び、同じ部屋で眠りについた白人と黒人の子供が、あるとき別々の世界に入ってゆくショックと愚かさを描きだすこともできたのではないのか。（『行け、モーセ』や『墓地への侵入者』）体のなかに流れるかもしれない「黒い血」に懊悩するクリスマスやチャールズ・ボンを、そしてボンの運命に思いを馳せて厳冬のニューイングランドにあつて「南部を憎んじやいない」と心のなかで叫ぶクエンタン・コンプソンを『アブサロム、アブサロム！』で蘇らせることができたのではないのか。多元的異文化交流を避けられぬ運命とする二一世紀への、予見的メッセージを送ることができたのではないのか。

このように考えてくれば、十九世紀後半の南部社会をうむ母胎となった再建期の歩みをたどることは意味のないことではない。むしろ、東洋の日本にあってアメリカ南部小説に関心を持つものとして、ひととおりのことは知っておくべきだろう——このように考え、おもに Kenneth M. Stamp (以後スタンプ)、Eric Foner (フォーナ)、それにおなじみの C. Vann Woodward (ウッドワード) といった歴史学者の著述を参考に、あくまで小説理解に役立つように再建期南部の動きをまとめたのが本章である。

三人のうちスタンプはどちらかといえば革新色が強く、最終的には再建期を肯定的に評価する。いっぽうフォーナは豊富なエピソードを駆使してなにより事実を重んずる実務派、ウッドワードはいうまでもなく親南部派である。三人の仕事のなかでは、記述を支える具体的証言やエピソード紹介などの点で、もっとも有力なフォーナの記念碑的著作『再建期—未完のアメリカ革命 一八六三～一八七七』(*Reconstruction: America's Unfinished Revolution 1863~1877*) が、とくに参考となったことをお断りしておきたい。だが、ニュアンスの微妙に異なる三人の仕事を読み比べることで、バランスのとれた再建期像を自分なりに、それも南部文学理解のための手段として把握することを、私自身としては目指している。だから、本章は第二章以降で作品を論ずることになるトウェインやケイブル理解のための予備知識として読まれるべき性質を備えている。十九世紀後半の南部文化の影は、それだけこの二人の作家の想像力に大きな影を落としているから。

二人の作家を念頭に置いて再建期を考えるさい、ポイントは二つに絞られる。ひとつは解放民の「その後」である。つまり、リンカーンによる一八六三年の奴隷解放宣言と、終戦後の六五年に成立した憲法補正第十三条によって、正式に消滅した奴隷の身分を抜けてた四〇〇万解放民を、再建期南部がどのように処遇したか、という問題である。

もうひとつは、旧体制が崩壊したあとの南部に、どのような「南部」を建設するかをめぐる南部社会の動き、つまり「新南部」建設運動である。これら二つのトピックは裏表の関係にあって、トウェインやケイブルの作品を考えると、欠かすこ

エクス 言語文化論集 第2号

とのできない視点であり、のちにふたたび姿を見せよう。再建期南部の動きを紹介することで遠回りになるように見えても、最終的にはこれら二つこそが本書における私の主要な関心事である。

第十七大統領アンドリュー・ジョンソン——自営農民への期待と「豹変」

リー麾下の北ヴァージニア軍がアポマトックスで降伏した一八六五年四月をもって、南軍の組織的抵抗は終わりを告げた。戦局の終盤では実体を失い、名目的存在でしかなかった南部連合国は事実として消滅した。だが、国家分裂の危機をようやく克服できたアメリカ合衆国は、ただちに南部における新たな秩序づくりに着手せねばならなかった。直接戦場となったために南部は壊滅状態にあり、敗者として当事者能力そのものを欠いていたから、リンカーン暗殺後あとを継いだアンドリュー・ジョンソンと共和党が戦後南部の運命を握っていた。再建期初期の数年は、このジョンソンが主役となる時期である。「大統領再建期」などと呼ばれる。

アンドリュー・ジョンソン（民主党）は彼のあとをついだユリシーズ・グラントと並んで、評判が悪い。歴代大統領を「偉大」から「落第」まで六つのランクに分類すると、二人とも「落第組」に入ってしまうらしい。（宇佐美 二〇一）なにしろジョンソンは下院の提訴に応じた上院が、合衆国史上弾劾裁判にかけた初めての大統領となってしまった。一票差でかろうじて弾劾そのものは免れたが、のちにセックス・スキャンダルでの偽証をめぐっておなじく弾劾寸前となったクリントン大統領と並び称されるお粗末ぶりである。

なぜこれほど不人気なのか、理由を見つめるのはむずかしくない。戦後南部の処理をめぐって、議会との関係がよくなかったのである。解放民への姿勢が反動的で、戦後アメリカのあるべきヴィジョンについても錯誤的だった。彼を考えるときに焦点となるのは、民主党を圧倒して議会を牛耳っていた共和党と大統領の関係である。とくに共和党内では少数派でありながら、事態の推移によって結果的に再建期の国策決定を左右する力を手中に収めるようになる共和党急進派との軋轢が、後世をして第十七代大統領の評価をおとしめることとなった。

南北戦争直後は、志を同じくする同盟者としてリンカーンのあとを継ぐにふさわしい、と彼を手放しで受け入れた急進派が、やがてジョンソンの政策に幻滅、離反、さらに敵対するにいたる。わずか三年間ほどのことである。弾劾裁判に至る過程を見ると、旧南部を支配した少数のプランターたちと、彼らの影響下にあった大多数の白人農民をめぐる隠微な葛藤が浮き彫りとなり、なにやら『アブサロム、アブサロム！』のサトペンやウオッシュ・ジョーンズの姿が透かし見えるようである。

ジョンソンは文字通りのたたきあげ、セルフメイド・マンだった。一八〇八年にノースカロライナに生まれ、少年時代を極貧のうちにすごした。わずか十歳で仕立屋の年季奉公にだされたが、辛抱できずに逃げ帰り、やがて一年後にまた戻っていったという涙ぐましいエピソードまで残っている。まったく学校教育を受けずに育つたらしい。とうぜん読み書き算数は不得手で、十八歳で二つ年下の妻と結婚したのち、彼女からあれこれ「教育」を受けた。転機は彼が十七歳のときに一家がテネシーに引っ越したことだった。一人しかいなかった町の仕立屋がよそに越したので開業し成功、そののちは暮らしも楽になり、トントン拍子に出世してゆく。暗殺された前大統領同様、アメリカン・ドリームを絵に描いたような立志伝中の人物だった。

ジョンソンは連邦を離脱して南部連合国に加わったテネシー州選出の上院議員だったが、連邦にとどまることを最後まで主張した。リンカーンの覚えもよく、占領下のテネシーを任されて六二年には軍政下の知事となった。このアメリカン・ドリームの体現者は戦前五人の奴隷を抱え、広大な土地を所有し、鉄道株に投資してもうけた、という。(フォーナ 一七六) 彼がなぜ南部のために立つこともない連邦主義者だったのか、そして南部敗北後は、短い蜜月のあいだ共和党急進派の信任を受けながら、やがて裏切り者と呼ばれるのか——カギは自営農への傾倒と、プランターへの反発にあるというのが、歴史家の見方である。

スタンプはジョンソンの政治思想に影響を与えた政治家としてトマス・ジェファソンとアンドリュー・ジャクソンを挙げている。(スタンプ 五四) ジェファソンからは農本主義的理想を受け継ぎ、それゆえ都市化を嫌い、都市を「道徳的退廃」と

見なした、という。またジャクソンからは平民主義とその裏返したる「貴族体制」への嫌悪を吸収した。だから大統領になったジョンソンが南部でつくりあげようとした社会は、「自営農民」が柱となって支える農本社会だった。建国来最大の危機を乗り越えて統一を再確認し、中央集権化を押し進め、北部産業の隆盛とともに都市化と工業化への道をしゃにむに進む戦後アメリカ社会の流れとは合致しないものだったのである。ややもすれば過去を理想化してノスタルジックなヴィジョンを掲げ、その意味ではロマンチックな政治家だったということである。

戦前のジョンソンの業績で今日評価が高いのは、知事時代に彼が実現させた公共教育制度だという。この制度のもとでもっとも恩恵を受けたのは言うまでもなく、貧しい農民たちだった。(フォーナー一七七) このように自営農民への思い入れが深いジョンソンにすれば、南北戦争はプランターが引き起こし、農民たちを巻き込んだ戦さであって、農民は被害者だということになる。だからジョンソンが戦後、旧プランター階級への厳罰を求め、連邦への裏切り者に容赦はいらぬ、と繰り返したのも理解できる。果ては大地主の土地を没収して分割し、「正直な農民たち」に売却する可能性をまじめに語ったという。(フォーナー一八三)「裕福な裏切り者たち」の資産で犠牲者に償うという発想である。南部で生まれ育ち、幼少の頃はいざ知らず、社会に出てからはトントン拍子に出世したにもかかわらず、たしかにプランターへの反発心旺盛な南部人ではあった。だからこそ共和党急進派も彼を支持したのである。

ところが、実際にジョンソン大統領が旧プランター階級にどのような政策を採ったのか。結論から言えば、事前に語っていたのとは大違いだった。あろうことか一般の自営農民ばかりか(それは理解できる)特権階級にも恩赦を乱発した。

戦争終結の翌月には早くも大がかりな恩赦が実施された。戦争中反乱軍たる南軍に参加したとしても、連邦への忠誠を誓い、奴隷解放を支持しさえすれば、全財産の回復が保証され、なんのとがめもなかった。再建南部の中核にとジョンソンが念頭に置いた多くの農民は当然恩赦を受けることができた。だが、旧プランター階級ではなくて彼らが再建南部の中核となって活躍して欲しいというジョンソンの目論見は失敗におわる。恩赦を受けた一般南部白人は、選挙ではやはり以前同様に旧プ

ランター階級を指導者として選んだから。要するに、農民と旧プランターのあいだにあった反目を過大評価したジョンソンは、農民たちの「反乱」に過剰な期待を寄せ、期待が大きかった分だけ逆に失望してしまったのである。終戦の年の選挙では、ミシシッピやテネシーは別としても、(スタンプ六七) 戦前同様の顔ぶれが南部諸州の政治社会を牛耳ることになった。当初のもくろみが失敗した大統領は、支配権を回復した旧特権階級に融和的姿勢をとりはじめる。自営農民が権力を掌握する「新南部」の理想を追求実現するために大統領権限をもちい、旧特権階級が復帰するのを拒否することはなかった。

当初旧南部連合の高官や将官たち、さらに評価額二万ドル以上の資産所有者は恩赦の対象から省かれていた。ただし、彼らにも個人的に大統領に恩赦を嘆願する道が開かれており、旧特権階級はこの方法をせいぜい利用することになった。一万三五〇〇件の恩赦を乱発した大統領は六七年秋には二回目の恩赦を布告、おかげで権利未回復の旧南部連合関係者はわずか数百人に激減。ついで翌六八年七月には三回目の恩赦布告を發布——これで恩赦の恵に浴さないを旧南部連合関係者はいなくなる。戦後わずか三年目のことだった。旧プランター階級が完全に息を吹き返す道を開いたのは、ほかならぬかつての反プランター派の筆頭たる大統領自身だったという歴史の皮肉である。

「報復」とも言うべき厳正な対応が必要だとまで語りながら、短期間のうちにこれほどまで旧体制を支えた人びとに寛大になったのはなぜか。豹変ぶりをどのように説明すべきか。この件をめぐるのはスタンプもフォーナも“mystery”(スタンプ七〇)あるいは“enigma”(フォーナ一七七)などとあきれているが、有力で説得的な理由を二つほどあげている。

ひとつはスタンプが前面に押し立てているもの。これはたぶん個人的、かつ心理的色彩がつよい。貧しい経歴から身をおこして大統領の椅子を射止めたジョンソンには、旧南部社会のエリートにたいする反発とともに、その裏返しとなったコンプレックスがあり、かつてのプランターが特赦を求めてホワイト・ハウスに日参し

てくると、それだけで彼らにたいする怒りや報復心が薄められ、かえって同情的にさえなった、というものである。戦前は自営農民の苦勞をよそに、この世の春を謳歌した旧支配階層が、いまや彼らの生殺与奪の権利を握るようになった自分を頼って平伏し、尊敬ばかりか追従の言葉さえ口にするのを見たとき、「南部人」としての共通の立場を大統領が思いおこしたというわけである。

最初の理由が大統領の過去の生い立ちにかかわり、それだけいわば心理的、文学的なのに引き換え、ふたつめの理由は政治家としての打算に基づく政治力学優先の説明である。つまり大統領は次の選挙をにらんで南部での支持者を獲得しておく必要があり、そこで支配層の協力を必要とした、というのである。

次期大統領選挙をめぐるジョンソンの計算を、フォーナは解放民たちの動向と絡みあわせて解説する。(一九一)終戦直後、白人にたいする支配従属が一夜にして覆されたために、ややもすれば白人との関係でトラブルを起こしがちだった解放民の動向をジョンソンは警戒していた。補佐役たる國務長官ウィリアム・H・スアードとともにイギリス大使と会見したとき、解放民への不信を募らせていた大統領が、彼らをめぐって発言した内容をフォーナが紹介している。(一九一)解放民には「白人への依存による監督と文明化の影響」を受けさせながら、「規律を守らせる」必要がある、というものである。解放民は「二流市民」にしかねれないとみて、いかに白人が創りあげてきた社会秩序のなかに定着させるかを、まず問題とする立場である。こうした考えを採るジョンソンにすれば、解放民問題に効率よく対処するためには、旧支配階級の力を利用するのがもっとも手っ取り早いということになっただろう。二期目の再選を果たしたい大統領が将来を展望したとき、過去の戦さの責任をめぐって旧支配階級に厳罰で臨むよりは、すでに選挙の結果にあらわれたとおり、南部白人の多くの支持を得た旧支配階級と手を組んだほうが、事は有利に運ぶというわけである。

黒人嫌いの大統領

いったいジョンソンはほんとうに奴隷制反対論者だったのか——大統領の言動を

たどってゆくとそんな疑問さえうかぶ。スタンプとフォーナではニュアンスが若干異なる。スタンプはずいぶん手厳しく、心の底では大統領は「断固たる黒人嫌い」ではなかったか、と示唆する。「合衆国のどの家族も主には奴隷が一人ついていて、家族たちの単調で下賤な仕事を引き受けてくれるように神に望む」と語った大統領の言葉を紹介し、ジャクソニアン・デモクラシーの信奉者だった彼も、しょせん白人のための平等主義を掲げていたにすぎぬ、という。(スタンプ 五六)

フォーナはスタンプほど厳しくはない。ただし、彼も黒人にたいするジョンソンの姿勢に（今のわれわれから見て）問題が多かったことを指摘する点では変わりない。リンカーンのもとでテネシー州知事を務めた頃、奴隷解放を歓迎したジョンソンではあったが、奴隷制を非難するときは、その非人道性を問題とはしなかったらしい。奴隷制の危険性として、もっぱら「白人との交わり」(“miscegenation”)をやり玉に挙げただけで、解放民の政治的役割や市民としての平等の権利については、なんの言質も与えなかった。大統領就任後もこうした姿勢に大きな変化はなかった。それどころか、あろうことかホワイトハウスを訪れた黒人指導者には、どこかよその国に移住してはどうか、と提案したこともある。国内の分離居留地に黒人たちは住めばよいというのは、実はリンカーンも公式に支持した考え方ではあった。(ウッドワード 四二) しかし黒人たちが堪え忍んできた奴隷としての境遇に、リンカーンが深い同情と理解をよせたのに比べ、ジョンソンにはそうした思いやりの気持ちは薄かった。

六七年末に議会にあてた教書で大統領は、黒人について「他のどの人種よりも統治能力」が劣り、「いかなる形態の独立政府であれ黒人の手で成功したものなどない。それどころか、黒人たちの思うように任せておくと、いつも未開状態に逆戻りする傾向がみられた。」(フォーナ 一七九～一八〇) と語った。これでは確かに合衆国大統領の公式文書に顔を出すもつとも差別的見解といわれても仕方あるまい。現代の政治風土にあっては、こうした演説を議会でおこなうような大統領の評価が低いのは当然である。

フォーナによれば、奴隷制時代とおなじように、解放民が自営農民の利益を脅か

すのではないかという疑念もまた、解放民へのジョンソン大統領の冷淡さを増幅することになった、という。(一八一) つまり、戦前多くの奴隷を抱える大プランターが南部を牛耳ったために不利益をこうむった自営農民に共感をよせる大統領は、自営農民が考えたのと同じく、事実はどうあれ、奴隷とプランターとを共通の利害をわかちあうパートナーと解釈した。解放民の地位改善がふたたび零細農民圧迫という結果をもたらしはしないか、と恐れたということである。プランターが解放民と組んで、ふたたび自営農民を脅かしはしないか、というわけである。自営農民に肩入れし、彼らが戦後南部で活躍してくれることを望んでいた大統領にすれば、解放民の地位向上に熱心になれなかったのもうなずけよう。

奴隷制を廃止して奴隷を解放してしまえば、連邦政府の役目は基本的に果たしたとするジョンソンだったから、解放民政策といっても内容はお粗末だった。解放民の福祉や教育のために連邦政府が前面にでて、保護や資金を提供する必要は感じていなかった。戦後、ジョンソン内閣が対解放民政策でまず決めねばならなかったのは、彼らに選挙権を与えるかどうか、だった。だが大統領はもちろん消極的で、この問題をめぐって閣議が分裂したときもイニシャチブを発揮しようとはせず、けっきょく南部の州政府が自ら決断することだという立場をとる。

スタンプによれば、普通選挙権を与えれば「人種戦争を誘発する」とジョンソンは語ったとも言われる。(スタンプ 七七) それだけ南部白人と解放民が相互に抱いていた不信感や反発を、大統領は憂慮した。おかげで南部の各州政府は選挙権を白人に限定することができた。解放民の教育についても、連邦政府が積極的改善に乗り出さなかったのだから州政府も奴隷制時代と同じ姿勢を解放民にとることができた。つまり、黒人が教育を受けると働かなくなり、ひいては南部経済に打撃を与える、というお決まりのものである。

解放民がつくべき仕事をめぐって、州政府がどのような「ヴィジョン」を持っていたかといえば、例えばテキサスの州憲法代表者会議に出席した一人の代議員が語った「木こりと水くみ」(スタンプ 七八) がせいぜいのところだった。

フォークナーの『征服されざる人たち』にあるように、北軍の進撃と「奴隷解放

宣言」によってプランテーションは一時期荒れるにまかされた。奴隷たちが逃げ出し、南部のプランテーション労働システムは打撃を受けた。だが、もはや「奴隷制」に戻ることもできない旧支配階層としては、あらたな労働システムを構築することが急務だった。そのためにも解放民は被熟練肉体労働者になってくれるのが、いちばんよかったのである。

疲弊した南部経済を立て直すためには、南部が得意とする綿花を中心とした人手のかかる農産物を生産せねばならない。そのためには奴隷制時代と変わらぬ安定した労働力が必須であり、解放民に以前同様プランテーション労働に従事させることが是非とも必要となる。そこで登場するのが「ブラックコード」（黒人取締法）である。

ブラックコードと土地の再分配

州によって微妙な違いはあるが、基本的にかつての奴隷制になるべく近い社会体制の復活をめざし、奴隷たちが忍従した劣悪な労働条件をふたたび解放民に押しつける——それが「ブラックコード」のねらいである。白人支配復活の土台として立案されたのだから、われわれには人権侵害としか言いようのない内容である。ブラックコードには結婚や同棲など、性をめぐる白人黒人両人種の個人的かかわりを規定した条項ももちろん含まれる。南部小説おなじみのモチーフである。だが、それはケイブルを論じた章にゆずり、ここではさしあたり両人種の労使関係について代表的なものを紹介する。次のようなものである。（一）黒人は自由に移動できない——かつてに動くとは浮浪罪が適用される、（二）都市では召使い以外の職業につけない、（三）許可なくして農業以外の職に就けない、（四）毎年初には、年間労働契約を結ばねばならない。年途中で辞めれば、それまでの賃金は支払われないばかりか逮捕される——その場合、白人なら誰が捕まえてもよかった。ほかにも陪審員をつとめる権利を認めず、白人にたいしては不利な証言をさせず、あげくのはて奴隷制時代には奴隷にも認められていた狩猟や魚釣り、あるいは家畜放牧にいたるまで「犯罪」とされた地域もあったという。（フォーナ 二〇三）

要するに、対黒人政策としては戦前より厳格になった部分もあったということである。解放民をプランテーションに縛りつけ、同時にプランターの意のままに彼らの生活を規制しようとする意図が露骨だった。

ブラックコードはもちろん解放民を怒らせただろうが、解放民がいちばん失望したのは「土地」を手にすることができなかつたことである。太平洋戦争後の日本でもそうだったが、南北戦争後の南部でも最大の経済問題のひとつが農地改革だった。旧プランターにたいする態度が豹変する以前、ジョンソン大統領が「反逆者」の土地を再配分して損害を受けた農民に分け与えようと、なかば真剣に考えていたのは、すでに述べたとおりである。土地を再配分するのか、しないのか、再配分する場合はどのように実施するかなど、問題は多かつたが、自分が耕す土地を手に入れられるかどうかは、解放民にとっては切実な問題だった。そして歴史を振り返れば、この問題こそ戦後南部が人種間の平等をめざし、安定した社会となれたかどうかの分岐点だったのである。

解放民が「自由」を手にしたとは言っても、その自由を実質あらしめるためには経済的裏付けが必要である。だが、解放民にはなにもなかつた。とりわけ土地がなかつた。教育を受けることができなかつたために読み書きもできず、だいいち工業中心の産業発展に後れをとり、農業こそが社会の基盤である南部に生きてゆくしかない解放民にすれば、農民として土地を耕す以外には暮らすすべがなかつた。土地さえ手に入れば、かつてのようにプランターの利益のために働くのではなく、自分たちの生活費を自力で稼ぎ出すこともできた。ながらく奴隷としてプランターのもとで酷使された解放民にとって、自分の土地をもち、みずからの力でその土地を耕すことが最大の希望となった。だが夢をかなえられたのは、一握りの人たちにすぎなかつた。例外的に幸運な人たちだったのである。

ジョンソンが有力プランターから土地を没収することはなかつた。前任者リンカーンは、反逆者にたいしては期間限定ながら、つまり所有者が生きているあいだは土地を実際に没収して懲罰を課し、その死後になってから子供に返還しよう、という程度は考えたのだが。自営農民の暮らしを熟知し、自らの土地を持つことの意味を

嫌というほど理解していたはずの大統領が、当初の威勢のいい言葉とは裏腹に、じっさいにはリンカーンよりも旧プランターにたいして甘かった。

たしかに一部の解放民がじっさいに自分たちの土地を手にしたことはあった。終戦直後の六五年夏、黒人たちの窮状をみかねたシャーマン将軍のもと、サウス・キャロライナやジョージアの一部で黒人一家族につき四〇エーカー以下に限って、旧プランターの土地が分け与えられたことがあった。フォーナによれば、この恩恵に浴した解放民は四万人にも及んだという。(フォーナ 一五九)

このときも解放民のために奮闘したのはもちろん「解放民局」(Freedmen's Bureau)であり、奴隷制廃止論者の将軍たちだった。六五年に創設され、六九年にはほとんどの活動を停止したのだから、活動期間はわずかに四年と短く、さまざまな批判があったし、一部に白人プランターたちと手を結ぶ職員もいたらしい。とはいえ、黒人たちの生活向上への貢献度からいえば、解放民局の存在は計り知れないものがあったという。食料配給や医療業務、教育施設の充実、賃金や労働条件をめぐる調停など、オーティス・ハワード将軍のもと、解放民局の奮闘ぶりはいまでも語り継がれているほどだから。

解放民に提供された土地といえば、スタンプは元南部連合国大統領ジェファースン・デービスと彼の兄弟が所有していた土地について触れ、彼らのプランテーションが僅かな期間ながら、一八〇〇人の黒人に配分されたことを記している。(スタンプ 一二七) 戦中戦後の南部の混乱を象徴する話である。こうした土地配分が広範囲に実現していれば、敗戦後南部がたどった道は大きく異なっていただろう。ジョンソンがめざした自営農民主導型の南部再興という夢も、「黒人自営農民」という大統領にすれば皮肉な形をとったにせよ、部分的には実現したかもしれない。だが、貧しくとも南部を少なくとも四〇〇万解放民にとって安定した社会にしたかも知れない農地改革は、砂上樓閣の運命をたどった。

元の土地所有者に恩赦を与えたのち、ジョンソンは黒人たちが耕した土地を旧地主に返還させる。六六年中頃には解放民局が所有していた土地の半分以上が、また次の数年のうちに返還はさらに進み、解放民の夢は苦い失望へとかわってゆく。自らの

エクス 言語文化論集 第2号

土地にたいする解放民の夢がいかに根強かったかは、終戦後数年を経て、土地があらかた旧地主に戻されたのちも、クリスマス・プレゼントとして年末に自分たちの農地がもらえるかもしれないと期待した解放民が、プランテーションでの翌年の労働契約をしぶったという話しが残っているほどである。(コップ 五五) 経済的自立を切望した彼らの思いが伝わってくる。

共和党と北部の反発

共和党の党是「自由民労働 (フリー・レイバー)」を逆なでするかのような旧プランター寄りの変節的姿勢をとるジョンソン大統領にたいしては、共和党ばかりか一般の北部世論も反発した。

反大統領勢力の筆頭は、奴隷制廃止後は黒人の権利回復をまずはじめに実現しようとしたチャールズ・サムナー (強行に土地没収を唱えた) やサディアス・ステイヴンズを中心とする共和党急進派だった。革新色の強かったニューイングランドを地盤とする彼らは、六五年末に招集された第三九回議会で南部における土地の再配分、黒人への法的、政治的平等、旧プランター政権に代わる暫定州政府樹立などを求めたが、失敗する。党内合意が得られなかったのである。急進派は当時下院では共和党議員の約半分、上院ではそれ以下でしかなかったという。(フォーナ 二三八)

共和党穏健派の出番となった。共和党穏健派は議会にたいし、設置期間延期を含めた解放民局支援関連法案と解放民の地位向上を念頭においた公民権法案を提出した。理想ではなく現実的政策実現を求めた彼らは、解放民にただちに参政権を与えよ、といった性急な主張はしなかった。もともと、穏健派といえども、戦前と比べれば革新色はやはり色濃かった。当時北部の多くの州が認めていなかった参政権は別としても、労働契約に基づいて解放民が白人労働者と平等の権利を雇用主から獲得できるように、法律を整備しようとしたほどだったから。解放民の政治的権利、懸案の参政権だけが棚上げされたのである。

大統領は大方の予想に反して共和党穏健派が提案した二つの法案を拒否した。公民権関連法にたいしては、解放民に市民権を与えることは、白人への差別となると

いう時代錯誤的議論まで展開したという。(フォーナ 二五〇) 拒否権発動は、もちろんひとつにはジョンソンのレーシスト的体質のなせるわざだったが、同時に州権にたいする連邦政府の権限拡大、つまり中央集権化への反発もあっただろう、とフォーナは分析している。(フォーナ 二五一)

だが、けっきょく問題の公民権法案は大統領拒否権を押し切って六六年に、共和党のほぼ全員一致で議会を通過した。大統領の強硬姿勢が共和党を一致団結させることになったのである。大統領との関係が悪化した共和党はさらに強硬となり、大統領拒否権の及ばない憲法補正第十四条を成立させ、リンカーンの遺産たる奴隷制廃止をうたった憲法補正第十三条を実質化しようとした。

憲法補正第十四条

補正第十四条の趣旨は第一節に要約されている——アメリカ市民の権利をめぐって連邦政府権限が州権に優越することを明確化し、「合衆国の法の支配のもとでの平等」(フォーナ 二五七) をアメリカ市民が共有することをうたう。つまり解放民への市民権付与である。第十四条によって、解放民の権利が連邦政府の保護と保証を獲得したことが再確認された。いかなる州も「法の正当な手続き」を経ずして、なん人の生命、自由、財産を奪うことも禁止された。戦後南部で法制化された「ブラックコード」の無効化に狙いがあった、とされる。ただし、参政権は別問題でいつものように棚上げされたが。

解放民に冷淡で州権を重んずるジョンソンは第十四条に反対した。おりから六六年には中間選挙が実施されて大統領は全国遊説をおこなったが、合衆国大統領にふさわしからぬ言葉遣いで共和攻撃を繰り返した。例えば、クリーブランドで「ジェフ・ディービスを吊せ」と叫んだ一人の聴衆にむかっては、「サッド・スティーヴンズとウェンデル・フィリップス(ともに奴隷制廃止論者だった共党急進派)をなんで吊さんのだ」(フォーナ 二六五) と応じたという逸話が残っているほどである。これではテネシーのあらくれ相手の田舎選挙である。とうぜん北部選挙民からはひんしゆくを買った。またこの選挙中にメンフィスやニューオーリンズでおきた

旧体制支持派による共和党员や黒人兵、解放民に対する暴力事件も、南部融和策に傾く大統領には不利に働き、人心は大統領から離反、けっきょく共和党は圧勝をおさめることができた。

あけて六七年、中間選挙後の連邦議会で共和党は（第一次）「再建法」を成立させた。ジョンソンはまたも拒否権を発動したが敗れる。連邦政府の意向をくんだテネシー州をのぞき、補正第十四条の批准を拒否した南部諸州は、「再建法」のもとで五つの軍管区に分けられて軍政がしかれることになった。南部の人びとがのちに辛辣に批判する「共和党支配」とは、実はこのとき以後の時期を直接には指す。

大統領ではなくて、議会（共和党）の意向をくんだ州政府を新たに樹立し、そののち初めて「反乱」を企てた南部諸州の連邦復帰を認めよう、というのが「再建法」の狙いである。復帰のための条件としては、まず南部諸州が第十四条を批准し、解放民参政権を含む成年男子選挙権を規定した州憲法を制定、批准することが求められた。そこで、泥縄式に各軍管区司令官が有権者を登録して選挙がおこなわれ、憲法批准州議会が開かれた。（ウッドワード 九一）有無をも言わせぬこうした共和党の意向によって、六八年頃にはそれまで棚上げされていた参政権が、あっさりと解放民のものとなった。南部びいきのウッドワードが黒人参政権をめぐって苦々しい真情を吐露するのは、このあたりの事情を指す。

要するに大統領と共和党との対立が引きおこした混乱のなかで、解放民への参政権賦与が実現していったことになる。だから解放民の参政権は、南部の新秩序創出にむけた政治力学が生みだしたあだ花という、皮肉な見方もできる。つまり、戦前同様権力の座に返り咲いた旧プランター勢力への北部の反発、彼らの跳梁を許した大統領のかたくなな姿勢、拒否権の乱発、大統領らしからぬ粗野で場所をわきまぬ反共和党的言動、六六年に入ってからメンフィスやニューオーリンズでおきた白人保守派による急進派への暴力事件、それに党の基盤強化のためにも解放民に参政権を白人（男子）と同じように与え、彼らの票を獲得して党勢拡大につなげたい、という政党としての共和党の内部事情や思惑——こうした個々のできごとがわずかな時間のうちに大きな流れとなり、穏健派を急進派に引き寄せたのである。「大統領

領による再建」から「急進派による再建」へと歴史は動いた。

急進派再建と解放民の参政権

解放民が初めて投票に参加した六七年秋の選挙では、大挙して投票所に押しよせる彼らの姿が見られたという——「投票所に来られるもので家に残っている者など一人もいなかった」（フォーナ 三一四）とは、アラバマに住むある白人共和党員の言である。わずか数年前の解放民の境遇を考えれば、彼らの高揚ぶりも理解できる。解放民登録者数が白人有権者数を制して登録有権者の過半数を占めた州が五州もあったという。（ウッドワード 五〇）投票結果は、とうぜん南部では共和党が各州議会最大勢力を占めることになった。もともと北部では事情は異なっていたが。

憲法制定州議会に選ばれた黒人議員の職業は牧師、職人、教師などが多く、労働者はごく少数だったという。州議会で議論の対象となった問題は多岐にわたった。旧南部の社会体制を支えた基盤見直しを行わねばならなかったからである——各州の憲法が黒人の公民権と政治的諸権利を保証したのはもちろんだったが、ほかにも、旧南部連合指導者層の参政権剥奪問題、大地主優遇税制の見直し、負債者への返済猶予、解放民が強く望んだ土地再配分や公共教育導入などが主だったところだった。

トウェインやケイブルが活躍するようになる一八八〇年代とのかかわりではどうか。フォーナは興味深い指摘をしている。つまり、このとき各州議会で与党となった共和党は総論では意見一致を見ながらも、いざ実施となると重い腰を上げられなかった。細かい議論や対応がバラバラだったのである。だから公共教育は実施するが、学校は人種統合するかどうかは棚上げ、黒人の公民権と政治的権利は漠然とは認めても、実生活の場での「社会的平等」（つまり、ケイブルを論じるさいに焦点となる、ホテルやレストラン、鉄道などで黒人客を白人と分け隔てなく扱うかどうか、など）をどう取り扱うか、さらに旧南部の封建的体制を廃止し、民主化を推進するのはいいが、州政府や自治体で黒人が優位を占めるのは望ましいかどうかなど、肝心の問題について党内意見は不一致だった。選挙結果が政党としての存続にかかわるすべてである限り、いかに急進的政策を振りかざす共和党といえど、やはり当

時の白人一般の意識をはるかに越える政策を立案実施することは自滅行為になりかねなかった。

はじめての参政権行使となった解放民の票を集めて、六七年の選挙を南部では勝ち取った共和党だったが、北部では惨敗を喫した。民主党の大勝利だった。戦争が終わり奴隷制廃止が現実のものとなったことで、北部選挙民の意識に変化が起きはじめていた、ということである。共和党が当初期待したようには、彼らはもはや共和党内急進派の政策に共感を示さなくなっていた。人心の移ろいやすさである。参政権を含め、解放民の処遇改善を訴えても、それが選挙民の賛意を得られるわけではなく、票に直結しないことを知った共和党穏健派は、急進派との関係を軌道修正することになる。ウッドワードの皮肉っぽい指摘によれば、六八年の共和党綱領のなかで、共和党はさっそく次のような言い回しで、解放民の参政権問題から後退しはじめる。いわく、「忠節を尽くした南部のすべての人びとに平等の参政権を与える保証を議会がおこなったのは、公共の安全、感謝の念、正義などをすべて考慮して必要だったから守らなければならないが、他方忠実だったすべての〔非南部〕諸州での参政権問題は、当然それらの州の人びとに帰属するものである。」（ウッドワード九八）と¹⁾。要するに、まだ参政権を持っていなかった北部の黒人に参政権を与えるかどうかは、州権に属することである、だから連邦政府は関知しないという姿勢である。これではウッドワードならずとも、共和党のご都合主義を感じざるを得まい。

六七年の選挙結果を受けて、共和党はこうして解放民問題への取り組みを弱めてゆく。急進派リーダー、サッド・スティーヴンズが六八年には亡くなったこともあり、「(南部) 再建を更に前進させるよりは、成功裡に再建を終結させよう」(フォー

1) 北部でもこの当時黒人に参政権が与えられていた州はごく僅かだった。『南部歴史の重み』によれば、「一八六五年にはウィスコンシン、ミネソタ、コネチカットが黒人に投票を許そうとする提案をくつがえしたし、一八六六年のネブラスカ州憲法は参政権を白人に限った。ニュージャージーとオハイオは一八六七年に、ミシガンとペンシルバニアは一八六八年に黒人参政権のための提案をはねつけた。一八六一年に「黒人がアメリカ民主主義の絶対必要な一部となりうると信じた白人アメリカ人は、おそらく一〇〇人に一人もいなかった」と主張する W・E・B デュボイスは、一八六八年になっても「アメリカは黒人参政権の準備ができていなかった」と結論している。(ウッドワード 四七)

ナ 三一六) とするようになる。

共和党再建期の成果と「シェア・クロッピング制」

誤解してはならないが、急進派の影響力が後退したとはいえ、ジョンソンが主導した再建期初期と比べると、参政権以外にも共和党再建期にはいくつかの重要な改革が断行され、成果があった。南部社会における解放民の立場に確かに一定の改善がみられたのである。

解放民に不利益と屈辱を強いた「ブラックコード」は力を弱めた。戦前同様に、解放民を自分たちの意のままに操ることのできる労働力たらしめようとした旧プランターの目論見は失敗した。解放民の移動や職業選択にたいする制約は取り払われた。徒弟見習いをとるには親の同意が必要となり、犯罪の定義を厳密化するため浮浪罪取締法は書き改められた。罰金を払えない違反者を働かせるのも禁止された。むち打ち刑のような体刑は非合法化されて死刑も急減した、という。(フォーナ 三七二)

先にも触れたとおり、戦後解放民は、その多くが一年契約を結んでプランテーションで働くことを求められた。ブラックコードのもとでは、途中でやめると賃金は支払われず、逃げだせば犯罪人扱いとなっていた。こうした時代錯誤的法律も改められた。政治的理由、また収穫直前にささいな理由で解雇する(つまり、プランターは賃金を支払う必要がなくなる)のも禁じられた。雇用者にたいして「先取特権」(債務者の財産から優先的に弁済を受ける権利)を被雇用者たる解放民も認められるようになった。要するに南部における労使の力関係のなかで、被雇用者の利益擁護をまず考慮するという姿勢が確立されたのである。フォーナは、ある白人プランターが一八七二年に口にした次のようなボヤキを紹介している——「南部のほとんどの州の法律では、小作人にはじゅうぶんな保護が与えられているのに、地主にはほとんどない」と。(フォーナ 三七三)

戦前と違い、思うように労働力を確保し、しかも監視の目を行き届かせることが難しくなったプランターたちは、ごく短期間の「契約労働制」をへて、やがて不本

意ながら「作物質権制」(share-cropping system)へと移行してゆく。これは自分たちの土地の一部を小作人にとときには長期間にわたって貸し付ける制度だから、プランターたちの立場からすれば、自らの土地に対する支配力低下である。だが、ブラックコードも無効となり、解放民には一定の配慮を払わざるを得なくなったプランターには、「作物質権制」が(少なくとも当初は)やむを得ぬ選択だった。

いっぽう解放民にしても「作物質権制」は、これまた少なくとも当初は悪い選択ではなかった。なぜなら、じっさいに自分が土地を所有するわけではなくても、この制度のもとではあれほど望んだ土地が「擬似的」にはあるが、自らのものとなったよろこび(もちろん錯覚だが)を味わうことができたから。しかも丹誠こめて働き、大きな収穫があれば自分の取り分も理屈のうえでは増えることになる。それに経済的自立は無理としても、「作物質権制」のもとでは戦前や再建期初期と違って、解放民も一定の自由を得ることができた。時間も労働も自分の意志で調整することが可能だったのである。

つまり「作物質権制」は再建期の状況下では、労使双方が妥協できたシステムだった。やがて時に一〇〇パーセントを超える利子を請求される掛け売りが、自分たちのささやかな「自由」を脅かし、いつも借金に追われることになるとは、解放民は気づかなかったようだ。

こうして南部農業の後進性として悪名高い“share-cropping system”は再建期が終わると、広く南部に定着してしまう。少なくとも出現当初は「奴隷制と賃金労働の中間駅」(フォーナ 四〇九)として過渡的性格をもち、労働側からむしろ歓迎を受けた制度が、解放民や土地を持たぬ白人小作人を苦しめることになる。

共和党州政府に参加した黒人たち

議会共和党との緊張を高めてしまったジョンソンは、ついに上院弾劾裁判にかけられる。議会主導の南部再建を支持した陸軍長官を、大統領が解任しようとしたのが直接のきっかけとなり、下院が弾劾を決定する。自分たちが主導する南部再建への妨害言動をやめない大統領を、共和党は追い落とそうとした。けっきょく上院で

は一票差で罷免こそ免れたが、次期大統領選挙にむけて民主党の支持も得られぬまま、ジョンソンは政治の表舞台を去った。一八六九年から二期八年におよぶ第十八大統領グラント時代の到来である。黒人問題から経済問題への転換が始まる。クランの行動が活発化し、解放民の自由な投票が難しくなる地域（例えばジョージアの一部）が出てきたのも、この頃のことだった。ジム・クロー時代への予兆が感じとれるようになる。

グラント政権の対南部姿勢についてふれるまえに、再建期に共和党州政府のもとで働いた人たち、とりわけ黒人たちの働きについて、触れないわけにはゆかない。共和党中央のリーダーシップのもと、南部各州に樹立された共和党政府の内部にも実は問題が多かった。古今東西いずこも同じで、権力奪取のあとには州の役職分配をめぐる内部抗争がよくおきた。カーペットバガー、スカラワグ、解放民出身議員、急進派に穏健派といった具合に、寄り合い所帯だったから、そのぶん余計に複雑だったようである。

特に戦後北部からやって来て南部に生活の足場を持たない共和党関係者、つまりカーペットバガーにすれば、自分が獲得したポストだけが生活を支えることになったから、よりよい地位を得ようとする努力も真剣にならざるをえなかった。もっとも、親南部派から言われるほど、カーペットバガーが利権をあさるためだけに南部にやって来た人たち、というわけではなかったようだ。個人的利益をめざすと同時に、南部民主化の理想に燃えた人も多かった——こうした人たちについては、第四章「ニューイングランド人の見た南部——『南部紀行』を読む」でも触れよう。

親南部派からは、ふるさとの大義に背いた裏切り者、というステロタイプとして語られることの多いスカラワグにしても、フォーナに言わせれば、背景や動機はカーペットバガーよりいっそう多様だったという。最後まで分離反対を貫いた人、「新南部」建設を夢見る企業家、あるいは南部の将来を展望して、連邦政府と直結した共和党州政府支持の立場をとった南部有数の資産家も混じっていた。だから、戦後の混乱した南部でどさくさに紛れて利権だけをあさるエゴイストというイメージは、親南部派が誇張して後世の人びとに植え付けた面もあり、それだけでスカラワグを

捉えるのはおかしいようだ。

ただし、カーペットバガーにせよスカラワグにせよ、共和党州政府のもとで働く限り、旧体制にノスタルジアを感じる多数派南部白人から毛嫌いされたのは仕方のないことだった。分離を支持して戦争を戦い抜き、あげくの果てに奴隷や土地、家屋など財産を失い、加えて荒廃したふるさとで生活の目処も立ちにくい一般南部白人にすれば、共和党が支配する新州政府とは、共和党連邦政府のロボットにすぎなかったのだから。泥縄式に与えられた解放民の票をもとにでっちあげた正当性さえ疑わしい、いかがわしい「政府」と映っただろうから²⁾。こうした保守派白人の歓心を買うためにも、共和党州政府としては解放民の待遇改善にばかり配慮した急進的政策を突き進むわけにはゆかなかった。

さて、共和党州政府のもとで解放民をふくめた黒人たちはいったいどのようなポストを獲得して、どんな活躍を見せたのだろうか。ここでも多くの資料を渉猟したフォーナの著作は具体例が豊富で参考になる。それによると、全体としては、予想通り南部共和党組織を支配していたのは白人で、黒人たちはそれほど重要な仕事を任せられたわけではない。せいぜい「郵便局長」や「土地法律事務所事務員」といった程度のものが多かったらしい。わずか数年前までは奴隷として読み書きが不自由な者も多かったのだから、やむを得なかつただろう。本格的に活躍するには実力不足で、時間が必要だった。

だが同時に、「再建期は黒人たちの役に立つばかりか、北部にあった以上の個人的栄達への可能性を黒人に提供したアメリカ史の数少ない時代だった」とフォーナは解説する。(二八七) それを裏付けるかのように、ごく少数だが、たとえば「内国税徴税官」や「ニューオーリンズ港輸入品検査官」など、要職に就く者もやはり出たという。

広大な南部のことだから、地域によっても解放民の活躍ぶりには違いがあった。再建期全期をとおし、サウス・キャロライナ下院では黒人議員が過半数を占め、重

2) 解放民が初めて投票権を行使した憲法制定州議会選挙では、低投票率のために選挙そのものが無効になることを狙って、棄権した登録済み白人が数多く出た州もあった。(フォーナ 三一四)

要な委員会を支配したうえ、州上院でも過半数を占めた年もあったという。またミシシッピーでは十五人（ウッドワードは十二人という）の黒人保安官が生まれ、彼らの統括する郡に黒人人口の三分の一以上が暮らしていた。黒人たちもやはり奮闘していたのである。

もちろん保留すべき点も多い。まともに読み書きもままならぬ解放民が、いきなり参政権を得て南部政治のひのき舞台に躍り出たことについては、親南部派のウッドワードなどは冷ややかに眺める傾向が強い。だから公職に就いた黒人たちのなかには芳（かんば）しからざる人がいたことを辛辣に指摘するのを忘れない。それに親南部の彼にすれば、共和党の党利党略、北部世論の急速な保守化など、この時代が北部サイドの思惑に振り回されすぎたことにも不満がある。だから、再建期を「黒人の最も素晴らしい時期、英雄的指導者と英雄的行為、高尚な信念と確固たる決断の時期、卒直で情熱的な行動の時期で『慎重速度』の妥協に屈伏することもなかった」（ウッドワード 五四）時代、などと無邪気に「黄金時代」のように理想化する黒人インテリにたいして、南部史の碩学は懸念をしめす。だが、そのウッドワードでさえ、再建期における黒人たちの活躍をめぐって最終的には好意的結論をくだしている。

「ふりかえれば、あれほど力量が乏しく経験も限られた人びとがあれだけ真面目で正直、かつ有能な指導者や公務員を生みだし、成功をおさめたことのほうが印象深い。どの州でもこうした指導者や公務員がいくらかは出たことが記録でわかるが、それは民主主義的信念への大きな慰めである。彼らは民主主義理論の長い試練のなかで、他のどの人びともさらされたことのなかった試練を果たそうとして血みどろの困難のもとで良心的に奮闘した人びとだったという感じがする。彼らの成功のほどは、州によってまちまちだった。ミシシッピーについて言えば、ヴァーノン・ホアートの結論は「州政府としてみると、全体として一八七〇年から一八七六年まで黒人と白人共和党員がミシシッピーにつくった政府は悪い政府ではなかった。州でも郡でも町でも、黒人は自分たちの数に見合っただけ官職に就くことはなかった。……郡の官職についた黒人はときに無知だったが、白人民党員や共和党員の統制のもと、黒人が官職を持たない郡とほとんど変らない形の政府をつくった。連邦議会でミシシッピー州を代表した三人は間然するところがなかった。立法府にいた黒人は自分たちの人種に特別有利になるよう求めることはなかった……。同僚の白人共和党員とともに、他のほとんどどの州と比べても少ない費用で彼らはおおいに機能拡大された政府をミシシッピー州にもたらした。」（ウッドワード 一〇二）

党の利益を念頭に置く共和党関係者が州政府の中核を占める傾向は避けようもない。だが、終戦直後の再建期に白人と肩を並べた黒人たちが、ともに南部の発展のために奮闘し、一定の成果をおさめたことは忘れるべきではなかろう。自らの生活基盤たる南部の地であって、四〇〇万解放民の暮らしを向上させるために政治の世界にむけて直接発言し、自らの意志を反映させたのである。数年前まで売買可能な「商品」だった人たちが、人間としてふるまえるようになったという事実は動かしがたい。短期間とはいえ、ジム・クロー時代とは異なった兩人種の関係が存在したのである。再建期は黒人側からすれば、やはり画期的な時代としか言いようがあるまい。

再建期経済の停滞と挫折

解放民の地位向上をめぐり、限定的ではあっても共和党再建期は一定の成果を収めた。さて、冒頭触れたように、もうひとつ再建期南部を特徴づけるものをあげるとすれば、それは経済発展への努力と挫折だった——豊かな「新南部」建設の夢と現実とのギャップだった。綿花栽培を中心としたプランテーション農業から脱却して農業を近代化し、同時に工業化と都市化を進めて南部社会の変貌を計ろうとする歩みと、その停滞である。南北戦争後、北部のめざましい経済発展とは裏腹に、貧しい多くの南部人と四〇〇万解放民に職と夢を与えるには、南部近代化がどうしても必要だった。そこで疲弊した南部経済を速やかに回復し、北部同様に豊かな社会とするための先兵として期待されたのが鉄道建設である。どの州も熱心だったという。鉄道やその他の産業振興に寄与してくれそうな財界人にたいして、戦後南部の自治体がどれほど追従的だったかは、「ショッキングというよりも哀れだった」とスタンプは述べている。近代化と工業化だけが南部の諸問題を解決できる、と共和党も民主党も信じて疑わなかった。「鉄道建設と工業化が果たせるなら、どんな代価も高くなかった」とは、当時の雰囲気言い当てたスタンプ（一八二）の言葉である。こうした南部の努力もあって、一八六八年から一八七二年にかけて、南部の鉄道敷設は大いに進み、三三〇〇マイル増加することになる——それ以前とくらべ

四〇パーセントの増加だった。(フォーナ 三九〇)

だが、このように一見華やかな鉄道建設も、やがて息切れする。というのも建設と運営に必要な資金が次第に膨張してゆき、州が助成できないほどの規模になっていったから。また鉄道建設の経済効果もインフラストラクチャーが脆弱だったため、期待したほどではなかった。それに一方では、鉄道建設資金をめぐって贈収賄がひんぱんに行われ、人びとの信頼が失われたこともあった。戦後の混乱が一段落した一八八〇年代になると、南部には大規模な繊維産業が勃興するようにはなる。だが再建期当初、共和党州政府の努力にもかかわらず、北部からの資金取り込みや、企業進出はかならずしも活発とは言えなかった。綿や既存の鉄工業などには投資しても、北部資本は新たな産業への投資を南部では見あわせた。人種問題は言うに及ばず、北部への拭いがたいわだかまりを抱え、遅れた産業基盤しか備えていなかった南部への投資リスクは大きすぎた。南部よりは、西部に投資するほうがずっと有利だったのである。

過去のしがらみを知らず、広大で肥沃な土地と豊かな天然資源を秘め、バッファローが群れなし、わずかな先住民しかいなかった西部のほうが、インフラストラクチャー再建から始めなければならなかった南部より、投資対象として魅力的だった。戦争終結と鉄道の発展拡張で、人口が大挙して移動しはじめていた（もちろんインディアンを押しつけ、殺戮しながら）西部のほうが、東部の工業製品の市場として有望だった。西部と比べると、どうしても色あせて見えたポトマック川以南に、新南部を建設しようとする夢は、はかばかしい成果を生まなかった。

グラント大統領の時代といえ、トウェインの『金びか時代』（一八七三）でも描かれるように、中央では不敗と汚職がはびこった時代だったが、南部でもご多分にもれず利権をめぐる汚職は多かったらしい。ひとつの大きな理由は、州政府の予算膨張や、さまざまな補助金出費の増大だった。工業化によってバラ色の南部を築け、という趣旨の金なのだから、企業や自治体はこぞって補助金を得ようとしたし、かわりをもった役人たちも「おすそわけ」にあずかろうとした。そしてこの時期、州の補助金のなかで最大のものがもちろん鉄道建設のための補助金だったのである。

共和党再建期、州予算が膨張したのは歴史的に見れば当然ではあった。州民の税負担が大きくなり、旧体制支持派の不満は募ったが、これは主として旧南部が低税率と引き換えに、久しくおざなりにしてきた医療、教育、福祉といった分野での現状改善に必要な資金を調達するためだった。旧南部がそれだけ遅れていたのである。大地主に有利だった不動産税をはじめとする各種税率も引き上げられた。負担を強いられたのは、言うまでもなく旧体制の元で低税率の恩恵を受けていた人びとだった。だが、なにも持っていなかった解放民への援助と彼らの生活向上のためには不可欠の「増税」だったとも言える。

財政的に脆弱な南部は北部資本導入に積極的だった。ここで見逃せないのは、北部資本との連携をはかる過程で、共和党州政府が解放民への急進的姿勢を弱めていったことである。参政権を与え終わってからというもの、解放民問題に共和党が及び腰となり、やがて再建の幕引きを計ろうとする姿勢をとりはじめることは、すでに述べた。

共和党の後退は一八七〇年三月に憲法補正第十五条が議会を通過すると、さらに明確となる。この補正は、合衆国市民の投票権は「人種、肌の色、かつての強制労役を条件」に拒否されることも制約されることもない、と第一節でうたう。だから確かに解放民の投票権保証へのだめ押しとなりはした。ところが、皮肉なことに第十五条の成立とともに、共和党内部では厄介な解放民問題はこれで解決済みだとする空気が広まってゆく。「反奴隷制協会」もこの年に解散し、熱烈な奴隷制廃止論者で、戦争中は連邦軍初の黒人部隊を二年の長きにわたって指揮したトマス・W・ヒギンソンのような人物でさえ、解放民もいつまでも国家の保護のもとにあるべきでない、とまで語ったという。(フォーナ 四四九) 社会的平等はいざ知らず、公民権も政治的平等も保証された以上、解放民はこれからは独力で地位向上に努めるべきだ、とする考え方である。

一八七〇年代になって共和党が南部黒人問題に関心をなくしていった理由について、スタンプの解説を補足的に紹介する——(一)「新南部」建設にともない、南部保守派が共和党のバックである北部資本家と協調関係を築きあげ、双方が「同盟

者」となっていたこと。つまり、南北指導層の利害一致が進んだというのである。(二) 共和党を取り巻く外部環境が好転した。アメリカ北西部の急速な工業化にともなって出現したクリーブランド、デトロイト、シカゴといった大都会が、いずれも共和党の金城湯池となって党勢の拡大安定につながった。南北戦争終結直後は勢力が不安定で、再建期初期には南部黒人票を当てにした新生共和党だったが、もはやその必要はなくなった、ということである。(スタンプ 二一二)

リンカーン以来、奴隷制と解放民問題でさんざん精力を使った共和党にすれば、安堵感と疲労感が同時におそってきたのである。ただし言うまでもなく、南部がいわゆる一連のジム・クロー法をつくり、狡猾、かつ合法的に黒人の投票を妨害するようになるのは、実は再建期が終わってから本格化してゆく。逆にいうと、二十世紀半ばまでつづく、そうした不法を許してしまう弱点を第十五条が持っていたということである。すなわち、第十五条は財産や教育を理由とする投票妨害を禁ずるとは、どこにも書いていない。これを逆手にとった南部は、知能テストや財産制限、あるいは「投票税」といった手段をもちいて、黒人の投票を妨害することになる。いまわしい抜け道だった。

補正第十五条の成立を待っていたかのように、一八七〇年にはテネシー、ノースキャロライナ、アラバマ、ジョージアが、また七四年から七五年にかけてはアーカンソー、ミシシッピが民主党勢力下に入った。七〇年を境に旧勢力の本格的復活が目立つようになる。共和党が敗退していった理由をフォーナはいくつかあげている——共和党の内紛、汚職、高い税金などが広範な支持を得られなかったこと、また特に深南部では、徐々に活発化していたクランの暴力活動が共和党支持で団結していた黒人票やその周辺の支持者の票を減らし、共和党の組織を弱体化させたことも忘れてはならない。だが、こうした地域的理由をはなれて、もっと根本的なところで共和党中央の姿勢が保守化してしまったのである。

奴隷制をめぐるイデオロギー論争が一段落したグラント時代のアメリカ政治は、国内の経済発展にともなって生まれたさまざまな経済問題を中心に動く。西部にむけて飛躍的に拡大してゆく鉄道建設にまつわる利権問題、鉄道建設用地をめぐる

頻発する贈収賄など、汚職とスキャンダル、鉄道会社のわがままに怒る西部農民の要求、急速な工業化にともなって増加した都市労働者の貧しさと少数の資本家との拡大する貧富格差、中国人を中心とする移民の問題など、どれをとってもアメリカが農業国から世界トップクラスの工業国へと変貌してゆく過程で、対応を迫られた問題だった。

また七三年には三〇〇万人の失業者を生んだ大不況が起き、経済が回復するには七〇年代末まで時間が必要だったこともあった。こうした経済問題への対応でグラント政権は手一杯だった。

憲法補正第十五条が成立して一安心し、南部への関心が弱まったグラント政権は、南部保守派の不穏な巻き返しに対しても中途半端な行動しかとれなかった。また、とろうとしなかった。なるほど就任直後の七一年にはクランの暴力に対しては連邦軍を動員し、特にサウス・キャロライナなどでは断固たる鎮圧に成功しはする。だが、たとえば七五年の選挙で保守派白人が公然と解放民や共和党関係者に暴力をふるって投票を妨害し、民主党支配をもくろんだミシシッピーはどうか。マサチューセッツ生まれのカーペットバガー・エームズ州知事の要請があったにもかかわらず、連邦軍は動員されなかった。「南部で毎年秋になるとこの調子で起きる暴動に国民は皆うんざりしていて、中央政府が少しでも介入しようものなら、すぐ非難する……」とは、このときグラントが検事総長宛書簡に記したボヤキである。(フォーナ 五六〇) 解放民をめぐる人種問題には合衆国大統領ばかりか国民一般もさじを投げかけていたのがわかる。

こうしてミシシッピー民主党は、一見合法的でありながら不当な手段によって議会多数派を獲得、共和党州知事は翌年辞任に追い込まれる。一世紀におよぶ民主党のミシシッピー単独支配のはじまりだった。ミシシッピー解放民は共和党とグラント大統領（それに彼らの背後にいたアメリカ白人有権者）に結果的に見捨てられたことになった。南部のなかの「南部」たるミシシッピーで起きたことは、他州でも多かれ少なかれ見られたことだったのは言うまでもない。そして黒人への抑圧と引き換えに、南部は安定してゆく。

南部のことは南部人に任せておけばよい（「ホーム・ルール」）という南部保守派の言い分に連邦政府も追随したのである。奴隷制と南北戦争の残照たる解放民問題をめぐる道徳的議論に終止符がうたれた。「再建期」幕引きの直接の原因となった「七七年の妥協」をみると、経済発展に専念しようとする南部の姿勢が象徴的にかがえて興味深い。

一八七六年、グラント引退後の大統領選挙をめぐって共和党は民主党と取引をおこなった。おかげで、当初本選挙で獲得した選挙人数では民主党に破れた共和党候補ラザフォード・ヘイズを、大統領に就任させることができた。投票結果に疑惑があったサウス・キャロライナ、フロリダ、ルイジアナから最後の連邦軍を撤収させ、南部に開発補助金を与える代わりに、共和党はグラントに続いて大統領の席を手に入れた³⁾。

氾濫を繰り返して南部を苦しめるミシシッピー川の改修と、南部と西部とを結びつけ、南部が西部の市場にアクセスするための最良手段としての「テキサス・パンフィック鉄道」完成のための補助金など、南部経済復興のための資金を望んだ民主党は、曲折はあったものの、けっきょく共和党との取引に応じた。大統領の椅子を共和党に譲る代わりに、南部にとって連邦政府から資金を引き出す絶好のチャンスを利用したのである。南部は名より実を欲しがった。このようにして南部が手に入れた莫大な連邦政府資金がミシシッピー河改修のためにどのように用いられたかについて、トウエインの証言が第二章「川の氾濫と小説家の想像力——『ミシシッピー河の暮らし』とテクノロジー」に見られよう。いずれにしても「七七年の妥協」とともに共和党最後の牙城だった南部三州が民主党支配に委ねられ、「再建期」は一八七七年をもって終了する。

3) 「七七年の妥協」をめぐって、じっさいの選挙人獲得人数がいくらだったのかについては、いまだに歴史学者のあいだで議論が続いているようである。一九五一年に上梓された研究書のなかで、ウッドワードはフロリダの選挙人四人は民主党のティルデンに与えられるべきもので、彼が大統領に選ばれてしかるべきだとするのが、「最近の歴史学者の合意」である（ウッドワード『新南部』二五）と書いている。だが、より新しく一九九四年に原著が出版された歴史書では、「南北の民主党員は、自分たちは勝てそうもないので選挙への異議申し立てもしないことを決定したというのが事実だった。」と解説するものもある。（本田 一八二）

「新南部」建設への歩み

南部が民主党の支配のもとに「安定」し、アメリカ経済も不況から立ち直った七〇年代末になると、北部やイギリス資本が（四〇〇万解放民を潜在的顧客にもつ）南部の市場性にあらためて着目し、積極的に投資を進めるようになった。「新南部」建設が前進しはじめたのである。

南部産業発展の要（かなめ）でありながら、北部に比べ見劣りした鉄道も八〇年代には大いに発展する。八〇年代に南部全体では鉄道敷設距離数は二・三五倍の増加をみたという。（ウッドワード『新南部』一二〇）一八八一年から九〇年に至るまで、ミシシッピー川以東の南部で一八〇もの鉄道会社が生まれた。文字通り鉄道ラッシュである。第二章では汽車をめぐるトウェインの思いを取りあげることになる。

戦後十五年にわたる遅々たる歩みと比べた場合、一八八〇年から二〇世紀に至る二〇年のあいだに南部は確かに特筆すべき成果をあげる。「新南部」を目指そうとする南部の努力が実を結び始める。南部の港から輸送された小麦は十倍、綿、製材済み木材、たばこ、石油、石炭などは二倍、もしくはそれ以上になったとウッドワードは解説している。（『新南部』一二六）特に注目すべきはアラバマ州バーミンハムを中心とする銑鉄生産だった。八〇年代末には、戦前のアメリカ国内生産高を上回る銑鉄が生産され、一八七六年から一九〇一年にかけての銑鉄生産はアメリカ全体では八倍にすぎないのに、南部では十七倍になったという。（ウッドワード『新南部』一二七）

こうした南部の工業発展は北部産業資本家にも注目された。南部にある石炭や鉄の生産地を視察に訪れた実業家グループのメンバーだったピッツバーグの鉄鋼王アンドリュー・カーネギーが、「南部はペンシルバニアのもっとも恐るべき敵だ」と断じた言葉を、南部びいきのウッドワードは、得意げに自著に引用している。

イーライ・ホイットニーによる綿繰り機の発明以来生産量が激増し、十九世紀全期にわたって南部の主力産品だった綿花栽培にも、八〇年代に入ると新たな発展が見られた。原材料としての綿花ではなくて、綿花を加工する繊維産業の勃興である。ウッドワードの説明によると、その素地は六〇年代以降の綿花生産量増加にあった

という。というのも戦争を挟んで南部が混乱と変革に明け暮れた時期にも、綿花の生産高だけは順調に増えていたから。連邦離脱、南北戦争、再建期をとおし、生産高を倍増、三倍増、もしくは四倍増した州もあった。「キング・コトウン」は健在だったのである。

一八八〇年の一六一工場を基準として計算すると、八〇年代に南部の紡績工場は一・五倍、さらに九〇年代末には二・五倍にまで増えた。しかも設置された機械は新式のものだった——この時期、紡績業発祥の地ニューイングランドでは明らかに工場数が減り、機械も旧式化したのにである。もちろん南部紡績業への投資額や、従業員数もめざましく増えたのは言うまでもない。

もっとも、この時期の南部の「経済発展」を強調しすぎることは誤解を招こう。一八八〇年代になると南部がいきなり近代化した、都市化をなしとげることができた、というわけでは決してなかった。都市人口比率はこの時期でもそれほど高くない。二一世紀に入ってもまだ名残が見られるように、他地域と比べれば、やはり農業地帯であったことに変わりはない。いくつかの産品については、めざましい飛躍があったが、アメリカ経済全体のなかで相対的に捉え直してみると、南部の「工業化」といっても、実体は貧弱というのが率直なところである。この時期は米国経済が旧世界の国々を抜いて、世界のトップバッターの地位を確保した時代だった。つまり、停滞する米国経済のなかで南部だけが発展をみたというのではなく、アメリカの国力がめざましく伸張したからこそ、南部もその波に乗る形で発展した、というほうが正しい。アメリカ全体の発展のなかに置くと、「一九〇〇年当時の南部は一八六〇年当時と同じくらい農村的だった。」(本田 二三二) というのが真実である。

ともあれ八〇年代の活発な鉄道建設、一次産品ばかりか銑鉄や紡績に代表される工業製品生産高の増加といった経済発展は、人びとの暮らしに刺激を与えて暮らしぶりを変えただけでなく、精神のあり方にも影響を与えた。楽観的で前向きな考え方が一部の南部人のあいだに見られるようになる。

この時期南部では、北部資本を積極的に取り入れて南部の近代化や都市化を加速させようとする若き南部のジャーナリストたちが輩出した。(ウッドワード『新南

部の起こり』 一四四) もちろん南部近代化志向は再建期にもあったが、今度の主役は北部からやって来たカーペットバガーやスカラワグではなかった。彼らが知事や指導者として実権を握っていた共和党州政府が主導するのではなくて、生粋の南部人、ただし戦争とは直接に関わりを持たなかった若い人びとが北部資本や産業の誘致をとなえたのである。こうした若年層の代表として、ヘンリー・グレイディを紹介しておく。

ヘンリー・W・グレイディ(一八五〇—一八八九)と「高貴なる復讐」

第五章以下でケイブルを論ずるさいに再登場するグレイディは、いまま南部有力紙のひとつである『アトランタ・コンスティテューション』の編集者として大活躍した。多方面に働きかけるだけの見識と行動力を持ち、夭折したことも手伝ってジョージアでは伝説的人物という。(ウッドワード『新南部』 一四六)

ジョージア州アセンズに生まれた彼は若いときからジャーナリズムに身を投じ、なんだか新聞発行に携わっては失敗するが、やがて『コンスティテューション』の仕事をはじめから頭角をあらわすようになった。彼の奮闘のおかげで、『コンスティテューション』週刊版は一八八七年には南部最大の発行部数を、また翌年には全米一の発行部数を誇ったという。ただし、グレイディは単に新聞編集者というよりも、もっと幅広く活躍した人物だった。三八歳の若さで一八八九年に亡くなったが、生前は大きな社会的影響力を持ったという。

活動範囲の広い人だった。まず社会改良家としての顔がある。綿だけではなく、栽培する農作物を多様化して農業の多角化をはかって安定経営を計れと農民たちに働きかけた。社会福祉にも熱心だった。ホームレスの人たちが飢えないようにとアトランタの人びとに呼びかけて生活物資を集める、あるいは南軍の負傷兵のための病院をつくるなど、メディアを利用して活発に活動した。

産業振興をめざして実業家に働きかけ、政治家たちを説得して当時各地で開催されていた博覧会を南部でも開催するよう奔走したし、はたまたボストンやニューヨークまで出かけて行って、大統領や有力財界人をまえに南北の融和を説いて回った。

もちろん北部資本の南部進出を促すためである。彼の夭折を招いたのも、直接の原因は十二月厳冬期のボストンで無理を押して演説し、それまでの疲労と寒さも災いして肺炎を病んだことにあった。ボストンでの聴衆はもちろん地元有力商工業者で、そのなかにはときの大統領ベンジャミン・ハリソンも含まれていたが、アトランタに戻った直後に病状が悪化して亡くなったのである。

グレイディの幅広い活動の原動力は、南部、とりわけ故郷ジョージアへの想いである。彼の雄弁と郷土愛をしのばせる言葉を紹介しよう。

私の大いなる願いといっても簡単なもの。この世での私の勤めが終わったとき、わが息子がよりよもつと立派なジョージアを、神が思し召しになった運命を果たしおえたジョージアを、町や都会が活動の中核となり、田園地帯が町を満たす尽きせぬ畑となり、せせらぎが紡績工場の紡ぎの音にあわせて流れ、過ぎゆく汽車のとどろきに森という森がこだまを返し、谷間は豊かな穀物で微笑み、牛や羊の群が囲いから出かけてゆくベルの音が丘からは聞こえ、二百万以上の人びとがジョージアの完璧な自立を賞賛し、愛でて祝福する——そんなジョージアの光景をわが息子が見渡しながらか、すつくと立ち上がり「私の父はこの仕事に一役買ったのです、ジョージアの人びとの記憶にわたしの父の名は生きています」と言えるなら、この世の勤めに私は大いに満足です。(ウォード)

スピーチには聖書はもちろんのこと、ギリシャ古典からの故事も顔をみせる。博学である。学生時代ジョージア大学では詩作にふけたともいい、古今東西の文学に親しみ優れた文学的素養をそなえた人物なのが見える。自分では「親譲りのおしゃべり好き」(グレイディ 一四四)などと謙遜するが、ひとたび語りだすと、確信と力にあふれたその言葉はキング牧師の演説をさえ彷彿させ、現代の読者にも訴えてくる。同じ南部出身という同郷のよしみも手伝ってウッドワードなどは、「ヘンリー・グレイディという名前には神秘が秘められていて、いまでも潜在的な力がこもっている」(ウッドワード『新南部』一四六)と激賞する。

どの演説を読んでも論鋒は鋭く、日々の暮らしに疲弊した南部人の心にとときにしみいり、あるいは迫り、誇り高いかつてのプライドを呼び覚ましたらう。読む者を酔わせる流れるような英語であり、南部人の暮らしを知悉した者だけが語れる言葉である。戦後の南部人(ただし、白人のこと)が旧南部の遺産を否定するのでは

なくて、しっかりと受け継ぎ、未来へのエネルギーへと転化し郷土の発展と繁栄に役立たせるようにうながす。雄弁である。

テキサス州ダラスで一八八七年十月におこなわれた「南部とその問題点」(“The South and Her Problems”)という演説を紹介する。なぜこの演説を選ぶかという点、グレイディが考える当時の南部の問題点、それに対するグレイディの解決策、さらには彼の人柄や思想までがまんべんなく織り込まれていると考えるから。さらにトウェインやケーブルが活躍した時代に南部に浸透していた文化風土を要約しているからである。演説のポイントは解放民問題と南部工業化の二点につきる。ほかの演説を見ても、この二つが常にグレイディの心を占めていた。

解放民の処遇とは第三六代リンドン・ジョンソン大統領下で成立した公民権法案成立に至るまで一世紀のあいだ、アメリカ最大の国内問題だった。そののちも、人種をめぐる隠微な葛藤は絶えることがない。二一世紀に入っても、くすぶり続けている。ましてや南北戦争終結後、わずか二〇年あまり。残念というべきか、あるいは当然と言うべきか、南部社会で解放民がどのような地位を占めるべきかをめぐるとグレイディの立場は、今日の目で見れば時代遅れと言うしかない。あとのケーブルのときにも紹介するが、この問題について、彼は現代のわれわれからすると文字通りの「レーシスト」なのである。まとめると次のごとし。

戦前戦中をとおして、奴隷のなかにはほんとうに主人に仕えて忠誠を尽くしてくれた者がいた。だが、戦争終結と共に多くの解放民(旧奴隷)は変わってしまった。むかしのよさを失った。これから南部は二つの人種を平和のうちに抱えてゆかないと破滅するだろう。だが同時に両人種は別々でなければ墮落を招く。しかも双方は平等でなければならぬ。そのさい支配するのは「優越人種たる白人」でなければならぬ。なぜなら白人は優越しているから。では、いかなる手段によって白人支配が実現できるかと言えば、「暴力ではなく党派的結合でもなく、白人票の誠実さ、白人の大いなる思いやりや正義」(グレイディ 三一)によって「黒人のなかでもましな階層がいやでも(白人支配を)支持するようにしむける」(グレイディ 三二)、というのである。

現代のわれわれから見ると、手前みそな南部パターンリズムにいろどられた考え方である。ちょうどダーウィンの進化論が幅を利かせていた時代で、優勝劣敗の思想が反映されている。世界のさまざまな人種や民族を優越人種と劣等人種、支配と服従といった二元論でとらえると、どのような恐ろしい結果が生まれるかは、二〇世紀前半の歴史がわれわれに語る場所であって、現代読者でグレイディのような考え方についてゆける人はいまい。グレイディの考える新南部ドクトリンにひそむ保守性を、デュボイスは「現代の封建制」と一刀両断しているが、たしかにあっている。

「優越人種たる白人」が解放民を支配しなければならない、なぜなら白人は優越しているから、というのは循環論法で説明にはなるまい。だが、これで当時の南部（そして多くの北部）白人は納得した。当時はこれだけでじゅうぶんだった。なにしろ再建期南部の歴史を改ざんし、クランを讃えて黒人たちの無法ぶりを「告発」したトマス・ディクソンの『ザ・クランズマン』（*The Clansman*）が出版されたのが、グレイディの死後一五年を経た一九〇五年。さらに、この小説をデーヴィッド・W・グリフィスが映画化した「国家の誕生」（“The Birth of a Nation”）が全米の拍手喝采を博し、記録的な興行成績をあげたのは、グレイディの死後二五年もたった一九一五年のことだった。もちろん、この映画が描き出す黒人像をめぐっては強い反対論もあった。心配したディクソンは旧知の仲である時の大統領ウッドローウィルソンに反対派との仲介を求めたという。すると、大統領はホワイトハウスで「国家の誕生」を上映するのを許し、自らも鑑賞して、あげくは感じ入ったとさえいう。再建期の解放民をどのように理解するかについて、第十七代大統領ジョンソンと第二八代大統領は、ほぼ半世紀を隔てつつも、あんがい近いところにいたのではないのか、と思わせる。（ウィンツ xix~xx）解放民を見るまなざしは、大きく変わってはいなかった。

さきにも見たように、七〇年代にすでに民主党のもとで南部の白人支配は復権している。だが、その過程ではグレイディの言葉が空疎に響くような、暴力や脅しなど無茶な手段が横行した。グレイディ自身もそのことを分かってはいただろう。残

念なことに立て板に水を流すような彼の雄弁は、嘆かわしい実体を糊塗するために用いられるにすぎず、解放民問題をめぐっての彼の姿勢には失望するしかない。

だが、たとえ解放民をめぐるグレイディの姿勢がわれわれの共感を呼ばないとしても、ふるさとへの彼のせつせつたる想いは「新南部」建設提言のなかに横溢している。南部発展のために彼がさまざまな知識を得る努力を怠らなかつたことは、たとえば世界の商品市況への詳細な言及などにもうかがえる。細かな数字をあげて各国の綿花や鉄の生産量を解説し、南部の奮闘ぶりをたたえる。世界市場が拡大するなかで、南部の綿は当時生産高が三倍となりエジプト、インド、ブラジルといったライバルを圧倒したという。同じように鉄、石炭、松を中心とする木材（ランバー）、みかげ石、大理石など南部の産出量がアメリカ全体の輸出量を左右する産品は少なくなかつた。ただし、こうした原材料を加工して付加価値を高める工業力が南部にはなかつた。富をもたらすテクノロジーとそのテクノロジーを利用した生産設備がなかつたのである——これこそ北部が南部を圧倒した分野であり、アメリカに富をもたらす源泉なのだが。次にあげるのは、南部になにが必要かを、スピーチのなかで「友人」の葬儀にたとえて語ったグレイディの解説である。彼の死の直前、一八八九年ボストンでのスピーチである。遺言だった。

みんなは大理石採石場のど真ん中に彼を埋葬しました。大理石の固まりをえぐって墓をつくった。ところが上に置くちっぽけな墓標ときたらバーモント製。松林のなかに埋葬したのはいいが、松でできた柩はシンシナチからの持ち込み、鉄鉱山のすぐ側に埋葬すると、柩の釘も墓穴を掘るショベルもピッツバーグのもです。羊が草をはむのに最良の土地の側に埋めると、柩をくくる帯に使う羊毛も、だいたい帯そのものが北部から運んできたもの。南部が供給できたのはなきがらと、地面に掘った穴以外にはなんにもない。柩を下ろして土くれがバラバラとかかるが、彼はニューヨーク製コートを着込み、ボストン製の靴を履き、ズボン、シャツはシンシナチ——あの世に行っても自分が暮らし、四年間も戦ったふるさと南部を彼が思い出せるものといつても、ただ凍りついた血管の血と骨のなかの髄液だけ。

だがわれわれも今は事態を改善しました。墓地から百ヤードも行かないところに世界最大の大理石切削工場を手に入れた。工場のまわりには五つも六つも羊毛工場がある、それに鉄鉱山、溶鉱炉、製鉄工場。みなさんにお目にかかろうと（北部のボストンに）私たちは大挙するでしょう。昨夜わが友カーネギー氏が話されたけれど、わたしたちは、二四年前にみなさんがわが地を侵したように、いま皆さんの領土のすみずみまで鉄で侵すことで高貴なる復讐を果たそうとしていま

す。(グレイディ一三三～三四)

南部の急速な経済成長を目標とするグレイディ流の新南部ドクトリンにたいしては、当然批判がある。『黒人のたましい』(The Souls of Black Folk)のなかで、W・E・B・デュボイスは南部工業化がもたらす拝金主義を憂う。南部を代表する都会アトランタが「物質的繁栄こそがすべての成功の試金石だと、夢想させるような方向に南部を」(第五章)引っ張ってゆくことになりはしないかと、恐れている。白人黒人を問わず、戦前の悠揚迫らぬ生活哲学、生活態度を身につけていた南部人(興味深いことに、この進歩的黒人運動家は旧体制のもとでそうした人間が生まれたことを否定していない)を俗悪な拝金主義者に変質させるのではないかと、危惧したのである。ほぼ同時代を生きたフォークナーと同じように、「真・善・美」にかかわって富こそが教育の目的となることに警鐘を鳴らした。デュボイスのおそれが現実のものとなっていたことは、たとえばミシシッピ川を下るトウェインが見聞するところとなる。

だがいつの時代でも繰り返される、精神性重視の価値観と物質的繁栄至上主義の是非をめぐって議論することはこの章の目的ではない。ここではただ、一八八〇年代の南部現状分析と南部人魂がグレイディの言葉にほとばしっていることを確認するにとどめる。郷土への想いを込めて「新南部」建設に命をかけた南部人の愛した南部の歴史、南部人のコンプレックスと誇り、そしてふたたび連邦の一員に復帰した南部が、友人たる北部にたいして抱く屈折した想いなど、ひたむきなジャーナリストの和魂洋才ならぬ「南魂北才」ともいべき心情が要約されていることを指摘するだけで十分である。

エクス 言語文化論集 第2号

本文中に引用、あるいは部分的に要約した文献は MLA 方式を参考に各々カッコ内に記号と該当ページで明示することとした。

Cobb, James C. *The Most Southern Place on Earth: The Mississippi Delta and the Roots of Regional Identity*. 1992: reprint, New York: Oxford UP., 1994.
→ (コップ)

DuBois, W.E.B. *The Souls of Black Folk*. 1903; New York: Penguin Books, 1996. (木島始ほか訳『黒人のたましい』、岩波文庫、1992年) → (デュボイス)
なお、訳文は岩波文庫のものをそのまま拝借している。

Foner, Eric. *Reconstruction: America's Unfinished Revolution 1863-1877*. 1988; reprint, New York: Harper & Row, 1989. → (フォーナ)

Stamp, Kenneth M. *The Era of Reconstruction 1865-1877*. Vintage Books; Random House, 1965. → (スタンプ)

Turpin, Edna Henry Lee, ed. *The New South and Other Addresses by Henry Woodfin Grady*. New York: Haskell House Publishers Ltd., 1969. → (グレイ
ディ)

Ward & Trent, et al. *The Cambridge History of English and American Literature*. New York: G.P. Putnam's Sons, vol. 16. Later National Literature. Part I. IV. The New South: Lanier. §11. Grady. 1907-21; New York: Bartleby.com, 2000 (www.bartleby.com/cambridge/). Internet, 8 Dec. 2001 → (ウォード)

Wintz, Cary D. Introduction. *The Clansman*. By Thomas Dixon, Jr. 1905. New York: M. E. Sharpe, Inc. 2001. → (ウィンツ)

Woodward, C. Vann. *The Burden of Southern History*. 3rd ed. Baton Rouge: Louisiana State University Press, 1993. → (ウッドワード)

杉山：解放民問題から「新南部」建設へ

Woodward, C. Vann. *Origins of the New South*. 1951; reprint, Baton Rouge: Louisiana State University Press, 1991. → (ウッドワード『新南部』)

宇佐美滋『アメリカ大統領を読む事典—世界最高権力者の素顔と野望』、講談社α文庫、2000年 → (宇佐美)

本田創造監修『アメリカの歴史3—南北戦争から20世紀へ』、三省堂、1996年 → (本田)